

伝来文書 鹿児島大名島津家に伝来した文書が島津家文書群で、そのうち東京大学史料編纂所所蔵分が、武家文書を代表すると国宝に指定され、その名称が島津家文書です。伝来文書は、各家の由緒と、当主等が正当な相続者と証明するための書類で家宝でした。

国宝と国宝に漏れたもの 島津家は 1858 年斉彬没後、その弟久光の子忠義が当主、実父久光が後見役になり、明治期に忠義と久光が侯爵となり島津本家と並立する島津玉里家が成立しました。また本家は、東京を本邸、鹿児島磯を別邸とし、そのうち、島津本家東京本邸の分が 1957 年編纂所に譲られました。公文書類 15133 点、写本 2689 冊、計 1 万 7 千余点と膨大で順次、指定文化財になっていました。一方で編纂所所蔵でないものは、島津家文書群を構成していたものですから、国宝に指定されるのを待っています。

錦と銀鑲の裂の豪華を表紙に包まれた文書 島津家の成立とその後継者を証明する文書原本を台紙に張った豪華絢爛な文書綴『歴代亀鑑』、『宝鑑』、『国統新亀鑑』、『手鑑』が島津家文書の中核で、島津光久が当主だった 1688 年に完成していました。

恵まれた環境 歴史的な古文書が現存している本曾は、表面には出ない波瀾万丈の物語、涙なしに語れない奇跡があります。島津家文書群も所有者、家臣、領民(地元の人々)、政治家等の適切な行動に、幸運もあり戦火や災害を乗り越えました。因みに編纂所は『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之 1~4』(1942~2011 年刊)に 1827 点を掲載しています。

汲めども尽きせぬ井戸の様に 鹿児島の歴史の根本史料が島津家文書にあることは、1940 年代『鹿児島県史』で明らかになっています。著名な歴史事項例えば秀吉の刀狩の場合、最良の原本は、島津家文書と指摘されています。鹿児島の人々が保存してきた島津家文書は歴史の宝庫です。全国で歴史史料として活用されれば国宝になった甲斐があるというものです。

研究発表 1

「地域の公共図書館と連携する医療・健康情報サービス
— 2008年度研究会報告のその後 —」

愛知医科大学医学情報センター（図書館） 市川 美智子

当館では、2007年から近隣公共図書館と連携して「健康支援」に取り組んでいます。2008年度研究会報告では、その時点での目的や展望を述べました。今回は、5年間の実践報告を行うとともに、6年目を迎えての課題・目標等について発表します。

【事業概要】

日常生活における問題解決を支援することは、公共図書館の重要な任務の一つです。中でも医療・健康情報は生活に直結する事柄のため、利用者からのニーズが増加しています。一方当館は、本学のミッションの一つである「地域貢献」を図書館の立場で実践したいと考えています。言い換えれば、健康支援事業は館種を超えて、双方のニーズにより成り立っているとも言えます。本事業は、大学図書館と四つの公共図書館が医療・健康に特化して協働していることが大きな特徴です。

【事業目的】

- 1 信頼性が高く理解しやすい医療・健康情報を一般市民に提供する。
- 2 利用者の知識向上と、医療に参加する力(医師とのコミュニケーションや自己決定等)の育成に貢献する。
- 3 図書館員の資質向上を図る。

【実施内容】

右記 URL 参照 <http://www.aichi-med-u.ac.jp/micl/meliline/top.html>

【今後の可能性】

地域連携パスファインダーの作成、イベントの開催等を通じて、医療・健康情報を評価し取捨選択する力を養うことができました。また、全ての館において、この事業が継続すべき業務として位置づけられるようになったことは、何ものにも代え難い成果といえます。6年目を迎えた今年度は、これらの成果を活かし新たな切り口で事業展開することを計画しています。

- 1) 市民に届くサービス…新着ブックリスト, 書架レイアウト, 全館共通見出し
- 2) 教育, 診療への貢献…読み聞かせ出前講座
- 3) 実務的な連携…レファレンス情報交換, 職場体験

研究発表 2

教員・学生が参加する図書館活用への取組み

同志社女子大学図書・情報センター 竹内 昌弘

同志社女子大学では、2000年度以降、度重なる学部学科の改組改編を行い、1999年度の2学部5学科2研究科体制から2012年度には5学部10学科4研究科を有する女子総合大学となった。その間に5学科、2研究科が新設され、図書資料は増加の一途をたどり、京田辺図書館の増築、2学科の今出川キャンパス移転による図書資料の大量移設などにより、本学図書館はここ数年でめまぐるしく変貌してきた。新設された学科は完成年度を迎え、適正な蔵書構成がキャンパス毎にできているか、利用者にとって有効な図書館サービスが提供できているかを改めて検証する時期に来ている。

そのような中、本学図書館では、2011年11月に『同志社女子大学図書館の目標』を定め、その目標を図書館専任職員と業務委託スタッフとが共有し、蜜に連絡を取り合いながら、より良い図書館サービスを提供するための改善策を画策している。また、図書館利用者アンケート（対象：教員・学生隔年）を毎年実施し、利用状況、利用者の要望の把握に努めている。

今回の研究発表では、図書館サービス改善策の中で、教員・学生が参加する図書館活用への取組みである「ゼミ選書ツアー」、「先生のおすすめ本」「図書館学生サポーター」について報告する。

「図書館で、できること。図書館が、できること。
—図書館と学生の協働によるコミュニケーションのかたち—」

大阪芸術大学図書館 多賀谷 津也子

図書館は、今、変わろうとしています。
紙媒体（図書・雑誌・新聞等）の情報だけではなく、電子情報（E-book・電子ジャーナル・データベース等）の両面を備えたハイブリッド図書館へと移行し、「静」だけではなく「動」の機能も備えたラーニングコモンズの導入も重要とされています。

そんな時代の変化の中で、これからの図書館は、一方通行のサービスだけではなく利用者との双方向のコミュニケーションが必要であると考えます。利用者（学生）にとって、「図書館で、できること。」の可能性が広がり、「図書館が、できること。」の枠が広がれば、「図書館と学生で、できること。」も新たに生まれるのではないのでしょうか。

本学図書館が、学生との協働で行った「図書館利用案内」のリニューアルや図書館での展覧会開催（図書館空間の活用）等、変化し、成長し続ける図書館を目指しての新たな取り組みを紹介し、利用者との双方向性を提案します。

「学術情報ネットワークが始まるころ（1986年あたりまでの話）」

四国学院大学図書館 藤尾 豊

学術情報ネットワーク（NACSIS）が大学図書館に導入されて約30年が経過した。パソコン（当時は「マイコン」と呼んでいた）が普及し始めたのも約30年前である。今、職場でコンピュータに向かいNACSISを使う私達は、大学図書館の歴史の中でかつてないほどの利便性を与えられた。しかもそれを普通のこととして仕事をしている。しかし約30年前、NACSISに対して異を唱えた人達が大勢いた。コンピュータを嫌悪した人達もいた。私達は、その人達が疑心暗鬼に駆られて本当の良さに気付かなかった、とふり返ることもできるが、反対には反対の理由があり、不安を醸す社会背景があった。

NACSISの計画が立てられた頃、国は全国的な情報通信ネットワーク計画を立て、図書館界もそれに同調するかのように立案し始めた。あげくには全国のすべての図書館を統合する法律を制定する動きまで見られた。日本は先進各国と同様、通信ネットワーク、コンピュータを高度情報化社会に必須だと考え、新しい時代を築く切り札だとみなしたのである。

私大図協中国・四国地区研究会では2011年度、川崎医療福祉大学附属図書館で、雨森弘行氏を講師として、講演『想いをかたちに一伸よしの深化を求めて一』を行った。雨森氏はかつて文部省に籍を置き、学術情報ネットワークの実現に尽力した方である。この講演で雨森氏は、ご自身の体験からネットワークの重要性を痛感し、夢の実現に向けて着実に歩を進めた回想を軸に、NACSISの歴史を丁寧に解説して下さった。記憶に残る、有意義な講演であった。雨森氏にとっては全国の大学図書館がつながることで協力し合えることが第一義で、NACSISはその道具に過ぎなかったが、反対派は統制化、合理化の手段だと見た。

現在NACSISを普通に使う私達は、そんな昔のことをふり返る閑はないかもしれない。そんなことより不安定な自分の身分、図書館からの異動の不安、あるいは図書館への異動の失望の方が大きな関心事なのかもしれない。しかし今、図書館で働いている私達は、図書館の歴史の中で働いているのであり、歴史の一部となる資料を扱っている。歴史が身近にあるはずの図書館員が、今日（と明日）しか見（え）ないのはとても残念なことだが、ちょっと前の出来事でも、知るといふことは大事なことだと思う。

本発表は、NACSISが稼働するころ図書館界がどんな状態にあったかを概観し、反対派が、本当に疑心暗鬼の主張しかしていなかったのかを考察する。

「西南学院大学図書館システムリプレイス」

西南学院大学図書館 山下 大輔

本学図書館では、2012年10月に図書館システムのリプレイスを行う予定で準備を進めている。当初は、本学の運用に合わせてパッケージをカスタマイズし業務の省力化を図ることとしていたが、諸事情によりパッケージのカスタマイズは必要最小限に抑えることとした。その為、特に改善要望が挙がっていた図書・雑誌支払処理において業務が繁雑になっていた部分をキャンパスサポート西南（学校法人西南学院の全額出資の収益事業法人）へ業務委託を行い、システム開発を行った。これにより図書館システム、財務システムの改修を行うことなく、図書館システムから財務システムへのデータ移行を行うことが可能となった。また、合わせて中間報告書の作成、決算用資料の作成までをシステム化を行う予定である。

結果として、受入・会計担当者の負担が軽減されると同時に予算管理・決算業務の省力化を行うことが出来る予定である。

また、今回は図書館システムリプレイスに合わせてリンクリゾルバ、文献管理システムを導入し、図書館入退館ゲート、webサイトのリニューアルも行うこととした。今回は、これらのシステム開発についての経緯や考え方を中心として、今回のシステムリプレイス全体について事例報告をさせていただきます。